

Title	ブルノオ・ヒルデブランドの一書簡：「共産党宣言」成立史の一資料
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.6 (1927. 6) ,p.832(110)- 841(119)
JaLC DOI	10.14991/001.19270601-0110
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270601-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ブルノオ・ヒルデブランドの一書簡

——「共產黨宣言」成立史の一資料——

平 井 新

「共產黨宣言」成立の経緯を明かにするためには怎うしても亡命者同盟並に正義者同盟に溯らなければならぬ。就中マルクス及びエンゲルス加盟前後の倫敦正義者同盟の實情を審かにすることが最も肝要である(一)。然るに之に關する信頼すべき研究は從來極めて少ない。Karl Marx の Herr Vogt, 1860. Marx, Enthüllungen über den Kommunitenprozess in Köln に於ける Engels の序文、Mehring, Mayer の研究(二)等何れも重要な根本資料たるを失はないが、其の何れも簡にして且つ黨派に偏してゐる。Wermuth und Sieber, Die Kommunistenverschwörungen des neunzehnten Jahrhunderts. 1853 の如きは著者共に警察官吏なるため、斯種の常として徒に爲にする虚構、捏造の節多く、後世研究者の典據とす可き事實の真相を傳ふることが少ない。この點に於いて Carl Grünberg, „Die Londoner Kommunistische Zeitschrift und andere Urkunden aus den Jahren 1847-48“ の如きは、唯一の權威ある研究であるが、之とて聊か隔靴搔痒の感なきを得ない。殊に史實の解釋動もすればマルクス、エンゲルスに對して竟に、前代の社會主義殊にワイトリング等の功績を認むるに餘りに吝かなるやの感

がある。曩に Ernst Draha は同盟の一八四六年十一月、一八四七年二月の兩宣言書を發見し(三)、最近 Max Nettlau は一八四五年四月乃至四六年一月倫敦共產主義労働者教育俱樂部で行はれた同盟綱領の討議に關する根本資料を提供するあつて(四)、此方面の詳細な研究を促してゐる。筆者は久しく此方面に没頭し、今多少の稿を得てゐる。近く又 Karl Grünberg は歴史派經濟學の巨匠 Bruno Hildebrand の遺稿中より圖らずも之に關する得難き史料を發見して之を „Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung“ 11. Jahrg. 3. Heft 1925 に掲載した。其れは一八四六年四月十四日の倫敦共產主義労働者教育俱樂部大會に出席して其翌十五日に認めたヒルデブランドの印象記とも稱すべき一書簡である。この書簡は當日會議の光景を極めて如實に描き出してゐる。書簡の筆者が當代隨一の經濟學者であり又大の社會主義嫌であるだけに一入の興味を唆られる。

斯様に社會主義嫌のヒルデブランドが如何なる動機から共產主義者の會合に出席したか。之は一應誰にも起る尤もな疑問であるが、彼が不朽の名著「現代及將來の經濟學」を播くことに依てこの疑問は略々解決される。本書の大部分は社會主義學說の論評に當てられ殊に其約三分の一はエンゲルスの見解特に「英國に於ける労働者階級の狀態」の批評に割愛されてゐる。此批評に到達するに先立て彼は研究の完璧を期するため單身英國に涉り、備に材料の蒐集と實狀の踏査とに費した。彼が正義者同盟の募兵地たる労働者教育俱樂部の大會に自ら親しく出席したのは決して彼の好事心に出たのでは無くして、寧ろ自家研究の一助に資せんためであつた。

斯くまで經濟的自由主義に反對した彼は、政治上に於いては、反對に可成り徹底した自由主義者

であつた。是がため彼はブラスラウ、ライプチヒ兩大學の學生時代より後年に到るまで屢々官憲の彈壓に會つた。一八四六年英國に涉り、殊更此地で彼は復活祭を迎へたのであるが、これは惟ふに祖國の喧騒を逃れて、靜かに自由の空氣を吸ふためであつたと言はれてゐる(五)。

以下譯出せんとする書簡は實に此滯英中に書かれたもので、日付は前記大會の翌日即ち一八四六年四月十五日となつてゐる。名宛人は無く而も文章が途中で終つてゐるのは吳も遺憾に堪えない。

倫敦にて

一八四六年四月十五日

色々と大切な事柄を見聞したが、其都度滅多に御手紙も差上げなかつた。其んな譯で、新鮮な印象の残つてゐる中に、二三の斷片的な感想を述べて、書き足りない旅行記の補ひをしなければならぬ破目になつた。小生は昨日倫敦の獨逸共產主義者俱樂部に出席したが以下はその見聞記の積りである。

小生の友人デイゼンバッハ Diezenbach が一昨日思ひ掛け無く、此俱樂部の監督者少くとも幹部の地位に居る人に會つて其際小生の話をしたら早速彼から口傳てに友人と小生とが昨日の大會に招待を受けたのである。其處で吾々は七時後一應シイガア・ドイツン Cigar Diwan に落合つて、それから一共に招待に應ずる約束をした。デイゼンバッハは此邊の世故には大變通じてゐたが、併し乍ら未だ共產主義者の會合には出席した事はなかつた。そんな譯で吾々は、期待半分、心配半分とい

ふ調子で九時半頃俱樂部の在る場所に行つた。家の造りを見ると階下は、あり來りの麥酒店で、ボオターや美味そな麥酒を賣つてゐるが別段、客の腰を下ろす場所としては見當らなかつた。其處を通り抜けて、階段を上ると階上には、テーブルと椅子の數から見れば約二百人位這入れそうな客間風の室があつた。約二十人位づゝ其處此處に塊まつて席に就き、簡易な夕餉のパンを食べたり、或は各自分の前に麥酒のコップを置いて、テエブル備付のパイプで煙草を喫んでゐる。その邊りに立つてゐる者もある。戸口が開く毎に新來者が這入て来る。こんな風で今少しすれば會議が始ることが明瞭り分つた。參會者は何れもきちんとした服装をして、其の態度には殊更作り飾つた様子とは無く、如何にも立派であるが、其顔付は矢張争はれぬもので、成程勞働階級の人達だなど頷かれた。會話用語は主として獨逸語であるが中には英語佛蘭西語を驟つてゐるものもある。室の隅にグラントピアノが置いてあつて樂符が乗つかつてゐる。自分は之を見て音樂趣味の乏しい倫敦で全く善い室を探し當てたものだと思つた。來てゐる人達にはちつとも知合が無いので、人目の付かない様に戸口と向合つて腰を掛け、吾々を招來して呉れたシヤッパ Schapper を待つ間、酒二盃とこの名物一ペニイ包の煙草とを注文した。間も無く年恰好三十六歳位の背の高い、頑丈した男が這入て來た。口髭は黒く、そして明るい射る様な目付で、押の強さうな態度であつた。デイゼンバッハの所につか／＼とやつて來た。僕は直ぐこの男が、後年瑞西、西班牙で革命運動に参加したフランクフルトの老革命家シヤッパだなど思つた。私は彼と挨拶したが彼の態度は全く丁重で、その上親み深いものであつた。しかし自分は彼が内心得意氣に大學の教授がなんだといふ風に私を看下ろして

あるのをよく悟ることが出来た。彼の案内を受けて室の片隅に共に腰を下ろした。彼は室の中にある張紙を私に指示した。それを見ると俱樂部の規約が書いてある。其標題は獨逸労働者教育俱樂部規約と書いてあつた。其れに依れば、正當の方法で糧を得、何等疾しい行爲を犯した事の無い者は誰でも入會の資格を持つてゐるが、併し入會に際しては、一會員の申出で他の會員の有利なる證明が必要である。俱樂部には會長、書記、司書、會計が居る。會員には二階級の區別がある。その一つは本來共産主義俱樂部會員で、規定の誓約に服した者、他は自由會員で、教育日課の時間だけ出席するものである。前者だけ俱樂部の決議に出席し、監督を選出し新會員入會の賛否を決定する。後者の地位は唯だ消極的で、教育日課を怠つた時のみ刑罰を受ける。俱樂部全體の最高原則とする所は人間は精神を訓練して初めて自由と自覺に到達する事が出来ると云ふのである。毎夕教育を受けるのは其のためである。最初の晩は英語、次は地理、三日目は歴史、四日目は圖書と物理、五日目唱歌、六日目舞蹈、七日目は特殊の共産主義的政策の教授を受ける。教授課目は半年毎に變はる。それから又屢々地理と一共に自然科學的教育が教へられる。會員は教育を受ける代りに一週五シルベルグロッセン又は六ペンスの寄金をする。病氣の時は一週七シルリング(二タアル、八シルベルグロッセン)を寄金する。其他各種の金錢的刑罰があるが何れも皆之は一般金庫の所得に加へられる。以上は規約の内容を、ほんの一寸覗いた儘、述べただけの事である。

吾々は指定の席に就いた。聽て客間は立錐の餘地も無い程一杯になつた。會長が開會の辭を述べた。自分は會長をよく見知つてゐるといふ譯ではないが、怎う見ても醫者としか見えなかつた。満場水を打つた様に靜肅になると皆が口からバイブを取る、それから裁縫職人の書記が立つて、今日ヒルデブラント、並にデイゼンバッハ兩氏がシャツバア君の紹介で來賓として出席せられてゐるが何誰もそれに御異議はありませぬかと讀上げたが、その口振りの立派な事は眞實に羨しい程であつた。次いで直ちに日程に移りシャツバア君は前週間の事件の報告をする。彼の演説は大變流暢で、深味のある、そして教へらるゝ所が多かつた。演説の模様からして、本俱樂部の通信員が遠方に派遣されてゐるのを知つた。シャツバアはマドリッドの通信員の書簡の内容を報告したが、それは軍閥的專制政治がクリスチナイ一派の寡頭政治のために顛覆された顛末を當時の新聞以上に仔細に亘つて報道してゐる。固より當然の事ではあるが彼の演説には到る所共産主義的色彩が濃厚に現はれ、フロレタリアの問題が終始彼の演説を貫く赤い糸であつた。實の所を云へば、自由主義の大部分は何か我慢も出来たが二三の個所では怎うしても我慢が出来なかつた。ガリチャ問題で、演説者は全く農民の味方をして、波蘭の愛國主義は單に極めて粗野な本能的衝動であると説き、卑怯にも貴族と農民とを互に畦合ひさせることに骨折て、隸屬關係を解くことが出来ない様にして置き乍ら農民達が國王の役人を殛せなかつた事を氣の毒がつてゐるメツテルニヒの外交を巧に且つ痛烈に攻撃した。愛蘭問題になると、彼は武力で血路を開いた人々の行爲を是認した。獨逸の問題では、彼は自由主義者と金權貴族政治の反對者であり、更に進んで、共産主義者に對し、その祕密の敵、即ち憲法に依て全力の政治的支配を擴大せんとする金權的自由主義者と提携せんより寧ろその公然の敵たるゼスキット教徒と提携せよとまで勸告した。

彼の演説は全く會衆に對して力強き印象を與へ、急激の相手が暫く鳴り止まなかつた。それに次いで書記が立つて、基督教採否の討議をした前回の共產主義者大會の議事録を讀み上げた。其れは非常に詳細を極めたものであり、而も總ての演説の主なる内容が悉く記載されてゐるので、僕は爰で直ちに俱樂部の信仰告白を知る事が出来た。其れに依れば基督教の獨斷的部分は科學即ち自然科學と矛盾するとの理由で拋棄されてしまつた。從て道德的部分は拋棄されてしまつたのである。何となれば此部分は一、人間を此岸より曖昧模糊たる彼岸に連れて行くものであり二、永遠の幸福のためにする善事の中にも最も明瞭なる利己主義を教へるものであるからである。人間の唯一の指導者は理性である。之が客觀的に進歩的科學の裡に具體化される。それ故に人間は現存科學の助に依り、出来る限り自己を教化し、總て行爲に於いても思索に於いても所與の實在を固守せねばならぬと。

之に次いで八日前既に各自に通知されてゐた新しき問題、即ち共產國家に於いては如何に兒童教育の制度を定む可きかの問題が議題に上つた。その際、會衆の過半が夫婦者であることに氣が付いて一寸吃驚した。討議が序論の範圍を幾何も出でなかつた事は心残りしたが、次いで婦人共有並に婦人解放が全く葬られ、寧ろ婦人を以て男子の精神を補ふものと論じ、結婚は道德的制度であつて之がため當時者相方は平等の權利を持てるも、天賦の才能や運命や活動範圍の相異せるため全く離れ〜にされるものであるとの議論を聞いた時には追に緊張して傾聴した甲斐もあると思つた。更に教育は肉體的、精神的、個人的政治的のものであり、生前から施さなければならぬと主張された。

た。

かくする中に次第に夜が更けて來たので此問題の討議は來週に延期された。小生はそれからシャツパアと親しく會て彼が何故自由主義に反對するのであるかと眞面目になつて議論した。それから二三の會員とも會ひ殊にシレジャ生れの指物師と話をした。次いで俱樂部の圖書室を參觀して、共產主義書を二三冊買つた。その中には瑞西のアウグスト・ベツケルの著書も在つたがそれは最も大膽に共產主義を辯護したものであつた。會衆は如何にも和氣霽々として、「お前」といふ親みのある言葉が、俱樂部の規則にも亦會員の胸底にも深く根差してゐる様に思はれた。

尙當夜の收穫や共產主義に就て僕の神經に感じた儘を、まとめて見ると左の如くである、——
先づ第一に僕の經驗した事は、シャツパア、アウグスト・ベツケル、マルクス、エンゲルス、シユスタア等の共產主義者の居る所、例之、倫敦、瑞西、白耳義及巴里では獨逸の政治的亡命者が何れも皆共產主義の指導者となつてゐるといふことである。唯巴里だけはファイン・Feinと云ふ最も優れた獨逸の亡命者が之に反對したために獨逸人の執權は大分遅れた、斯様に到處で獨逸の政治的亡命者が共產主義の指導者となつてゐるといふ其理由は極めて明瞭である。是等亡命者達は正真正銘のプロレタリアで、それこそ身に付けるものとしては鏢一文も持たず、生存競争には逆も浮ぶ瀬の無い逆中許りである。從てプロレタリアの意識は彼等に最も濃厚に現れてゐるのは當然である。その上彼等は何れも獨逸の大學で學び、哲學の影響の下に育ち、天惟思索の才を備へてゐるので新しき思想の世界を勇敢に把へることが出来たのである。加之彼等は又政治にも相當の經驗を持ち、獨逸の民衆

が政治思想に極めて無關心であることをよく知り、母國の國家的生活の改善に對しては或種の懷疑を持てゐた。彼等の政治的理想は實際經驗の賜物であると云ふよりも寧ろ哲學の畑で育つたので、間もなく他國の缺點や暗黒面に逢着した。即ち彼等は愛蘭の懊惱と英國の地主的貴族政治を考へ較べ、七月王政に對する不満、増大する金權貴族政治の壓迫、瑞西に於けるゼスケット教徒の運動を見た。かくて彼等の愛國的欲求及び理想が同胞提携の精神に變つたことは寧ろ極めて自然の成行であつた。

其處でアブリオリに、獨逸的要素の出現は共產主義の發展に何等かの影響無きを得ないと結論する事が出来る。而もこの影響を特に知ることが必要となる。僕は此點に關して次の様な結果を得た。

第一、僕の大變愉快に堪えないのは獨逸の亡命者達が到る所で共產主義の中に科學の眞價を認めたことである。物質的生活は今や精神的生活の手段たるべきものである。共產主義的憲法は古代の奴隸制度に代る可きものである。全人類は物質的勞働否寧ろ物質的勞働の壓迫から解放される可きである。アウグスト・ベツケルは言ふ、雅典の滅亡は共產主義を知らなかつたからである。スバルタの滅亡は科學を侮蔑したからである。若し僕が………でなかつたならば此言葉を少しも信頼せず、寧ろ個人的のものと考へた事であらう』

(一九二七五、二三)

(一) 拙稿「共產黨宣言」前史の「附參照三田學會雜誌第二十卷六號

(11) Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. Derselbe, — Einleitung und Anmerkungen zu seiner Ausgabe von

„Aus dem literarischen Nachlass von Marx und Engels. Derselbe, Einleitung und Anmerkungen zur Jubiläumsausgabe von Weitling, Garantien der Harmonie und Freiheit, 1908. Derselbe, Einleitung und Anmerkungen zu „Marx, Enthüllungen über den Kommunistenprozess in Köln 1914. Derselbe, Der Bund der Kommunisten, Neue Zeit 29 Jahrg II. Derselbe, Karl Marx. 1920—Gustav Mayer, — Friedrich Engels in seiner Frühzeit. 1920.

(12) Ernst Drahn, Zur Vorgeschichte des kommunistischen Manifestes und der Arbeiterbewegung, Neue Zeit 37 Jahrg II.

(13) Max Nettlau, Londoner deutsche kommunistische Diskussionen 1845. Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung. X. Jahrg. 2. u. 3. Heft. Derselbe, — Marxanalekten. ebenda VIII.

(14) Carl Gräber, Bruno Hildebrand über den kommunistischen Arbeiterbildungsverein in London. ebenda 12 Jahrg. 3. s. 454.